九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

噶爾丹侵入當時の外蒙喀爾喀葛

井邊,一家

https://doi.org/10.15017/2340975

出版情報:史淵. 19, pp. 226-246, 1938-12-10. 九州帝国大学法文学部

バージョン: 権利関係:

噶爾丹侵入當時の外蒙喀爾喀

邊一家

井

_

魯特蒙古噶爾丹の武力干渉となり、 制覇が普通蒙古に於ける越境奪略等に基く私闘とは性質を異にし、 丹の初期の關係について一考察をしてみたいと思ふのである。 になり、又これ以後清朝の勢力は遠く新疆西藏にまで及ぶことになつた。この内紛時代の喀爾喀と噶爾 は十年にわたる大きな戦亂時代を現出した。 に於ける私鬪が左右兩翼の勢力爭となり、その結果は左翼勢力の伸張擴大となつた。この左翼の喀爾喀 噶爾丹の外蒙喀爾喀侵略の動機となつたのは喀爾喀內部に於ける內篋であつた。 即ち喀爾喀右翼內部 之れ等の仲裁問題をめぐつて、 この大動観をとほして外蒙略爾喀は清朝の治下に入ること 清朝と西藏が渦中に投じ、 大きな政治上の問題に伸展した。 西北 一帶 厄

謝圖汗、 喀爾喀は後には四大部四盟に分れたが、 右翼の長は扎薩克圖汗であつた。 以下皇朝藩部要略によつて略述すれば、康熙元年その右翼内 康熙卅一年までは左右兩翼の二大部であつて、 左翼の長は土

準據した政策をとつてゐた。大清實錄康熙十九年八月戊子理藩院題下に、 に訴へたのである。そこで康熙帝は達賴喇嘛を共に喀爾喀問題を解決せんとして 阿齊圖格隆を西藏に送 俱應發還。爲此差扎爾布奈前來蒞盟。而左翼上謝圖汗不至。皇上係我大衆之主。謹以此情上聞。至是。 屢々これを交渉したけれざも、 貢してゐる。 つたのであつた。云ふまでもなくこれまで清朝に於いては事蒙古に闘する場合、 熙廿一年になつてゐる。 議 上念喀爾喀累世恭順。 錄康熙廿三年二月庚子の條に、曾往訴達賴喇嘛。蒙諭七旗曰。爾七旗當共尊扎薩克圖汗。 旺舒克の弟成袞が扎薩圖汗號を襲ぐと、上謝圖汗に交渉して額珠沁の飢後左翼に逃亡した部衆を求め、 魯特に走らした事件である。これより扎薩克圖汗一族の爭が絕えず、 旺舒克の死後兄の綽墨爾根が自立 額琳沁の殺す所となり、 II して汗を稱したが、その衆は彼に附かず、多く土謝圖汗察琿多爾濟に歸した。そこで康熙九年になつて 進貢は以前は車臣濟農を首としたが、 和云々とあるが、こくに曾て達賴喇嘛に訴へて會盟せんとしたといふのは、 内紛が起つてゐる。 達頼喇嘛の給する文内にはこの厄魯德尼濟農を首となすといふ文字がない。 職貢有年。不忍其子弟人民離散。遣阿齊圖格隆等。 是れより先き扎薩克圖汗諾爾布が卒し、 その時土謝岡汗が會盟に來なかつたから、 同時に土謝圖汗察琿多爾濟、 匿して與へないので、遂に西蔵の達賴喇嘛に訴へ出たのである。 今扎薩克圖汗が車臣濟農を改めて、 賽因諾顏部長丹津喇嘛の兵が額琳沁を撃つて、 子旺舒克が襲いで汗を稱したが、 やむなく廿三年になつてそれを清朝 喀爾喀の進貢に關して喀爾喀 齎敕往論達賴喇嘛。 厄鲁德尼濟農を首として進 皇朝藩部要略によれば康 一々達賴喇嘛の方針に 共投左翼人民 これを如何に 今彼遣使 同族 厄

盟に列した。噶爾丹が最後まで喀爾喀侵入の口實として 哲卜尊丹巴胡土克圖が達賴喇嘛を侮辱したとい この時哲ト尊丹巴胡土克圖は達賴喇嘛の使者噶爾旦西勒圖と席次問題で爭ひ、遂に對等の席を占めて會 濟は親ら來らす、弟の哲ト尊丹巴胡土克圖を使はした。 成袞が卒して新に扎薩克圖汗を襲いだ沙喇が阿喇尼に隨つて庫輪伯勒齊に赴いたが、 年理藩院尙書阿喇尼は敕をもたらして、達賴喇嘛の使噶爾丹西勒圖を會することになつた。 であるから、 すべきかといふことが問題になつてゐる。 爾濟は亡命者の半を沙喇に歸したのみで、この長年にわたる問題は圓滿解決の運びに至らなかつた。 ふのはこの事件であつた。 蒙古兩大汗の紛爭問題に於いてこれに遺使したのは當然のことであつた。 か」る些少な問題に至るまで達賴喇嘛の指針が問題になるの この會盟に於いても何かと紛爭を生じ、 土謝圖汗察蹕多爾 あくて康熙廿五 丁度この年 察琿多 叉

圖汗の要求する部衆の僅かに半を歸したに過ぎなかつた。 かくて扎薩克圖汗沙喇が最後に助力を求めた 参加せる土謝圖汗の弟哲ト尊丹巴胡土克圖は達賴喇嘛の使者とその席を争つて 對等の席を占め、 のは厄魯特蒙古の噶爾丹であつたと思はれる。 以 今叉廿五年達賴喇嘛で康熙帝の主唱下に會盟を催したが、 上眺めた如く土謝圖汗の行爲には暴漫無禮な節が多く、 廿一年達賴喇嘛の提唱した會盟には出席せ 土謝圖汗自身の出席をみず、 扎薩克

確執を生じてゐる。同じく皇朝藩部要路によると、康熙十六年厄魯特部の鄂齊爾圖汗は同部の台吉噶爾丹 當時喀爾喀の覇權を握らんとしてゐた土謝圖汗と厄魯特部の平定に志した噶爾丹は、 これ又早くより

の襲 大敗。 獨斯 ある。 言し、之を云ひてやますとある(聖或領記)のをみると、 が露西亜接兵の事實をしらべて、その實なきを知るに及んで、 蒙古の實權者土謝圖汗に對しては、常にかうした虚勢を張らねばならなかつたのではない 丹と不和になつてゐたので 交戰するに至つた。 ト等來攻した爲、 て叛き去つたから、 及西海羅卜藏滾布。 **卜圖克森。巴爾丹等人畜而去。土謝圖汗追殺多爾濟扎卜。** 薩克圖汗等叛去。我土謝圖汗領兵追而執之以歸。後噶爾丹之弟多爾濟扎卜等。領兵來掠右翼班第戴青台吉 いて敵視することになつたが、 とて不思議とするに足らないのである。 ふ所となり、 諾爾地 僅以身発とのべてゐる。 東華錄廿七年七月壬申澤卜尊丹巴胡土克圖告急奏に、 方。 今噶 土謝圖汗は之を救つたが、 追撃して之を殺した。 我が上謝圖汗は兵を率あて追ひ、これを執へて歸つた。 且つその女を鄂齊爾岡汗の孫羅卜藏布阿喇布坦に嫁せしめてゐる。 爾丹自杭愛山後。 領兵前至噶爾丹所駐之地。 あるから、 この頃噶爾丹が土謝圖汗にむかつて、 これによれば噶爾丹が兵三萬餘を率るて來攻し、 掠取左右翼台吉等。 今土謝圖汗の勢力に壓倒され 噶爾丹は再び來攻したから、 上謝圖汗は噶爾丹との間に今又新たに扎薩克圖汗部の 鄂齊爾圖汗の殺さる」に及んで、 遇達賴喇嘛使者所遣人。 收回人口。 至芯木爾地方。 西方厄魯特に覇をとなへた噶爾丹も、 去年噶爾丹。 遂に自ら噶爾丹の所在 んとした扎薩克圖汗がこれ 我等には俄羅斯の援兵があると揚 土謝圖汗等之を追ふて噶爾丹の所 噶爾丹又領兵三路而來。 宣示皇上諭和之旨。 率兵三萬餘分道而來。 土謝圖汗之子噶爾丹台吉與戰 その後噶爾丹の弟多爾濟扎 遂に土 我が扎薩克圖汗を誘 地に侵入した 謝圖汗は噶爾丹と 土謝圖 か 遂退駐楚克 問 汗 に投じた 土謝圖汗 土謝圖汗 誘我 喀爾喀 題に は噶爾 ので

To 駐地 兵を出して札薩圖汗を打ち破り、 喀の胡土克圖を立腹させ、 悔したのを怒つてゐた噶爾丹は使を送つて、 發するといふのである。まだ噶爾丹の出動せぬ前にその噂によつて 出兵したもの 、 やうである。 謝圖汗はこの噶爾丹の興兵は事實であつて、 狀。恐屬窺何。 之情形。非特尚書阿喇尼見之。他人亦盡知之。彼見今與厄魯特杜噶爾阿喇布坦台吉。 喀通好者。 遣使奏に、 先に突きさして衆に示した。これに激怒して噶爾丹は喀爾喀にむかつて大學進軍したのは何等驚くべき うした噶爾丹の交渉もまとまるに至らなかつた。 が噶爾丹の侵略を報じたものと比較してみると、 なつて噶爾丹が大擧して侵寇し來り、喀爾喀が大敗するに至つたといふのである。 これを前年土 の蒙古史によると、 **噶爾丹興兵是實。我界上人等驚惶屢促出兵。赴彼應敵。是以率兵起行。** に迫つたが、 俱言噶爾丹分南北兩路來攻。喀爾喀右翼人等。 噶爾丹書至。我等會遣使致覆本意終不釋。然且喀爾喀之在厄魯特處者。 此爲馳走とある。これによれば噶爾丹から土謝圖汗に書を送つて交渉してゐる。 達賴喇嘛の使者が遣した人に遇つて、 會盟後土謝圖汗に平和實現の意がないので、 彼はその使を縛りあげ、 それから噶爾丹の領地に侵入して、 その苦情をのべ條約の實行を迫つた。 界上の人等驚惶して出兵を促すから、 東華錄廿六年九月庚子喀爾喀土謝圖汗戴青墨爾根台吉 と同時に噶爾丹侵蹇の噂が高まつたものであらう。 無禮な返書をつけて突きかへした。 皇上の諭和を宣示されたので退却した。 除札薩克圖汗及得克得黑戴青台吉之外。 會盟に於いて達賴喇嘛の代表者を輕 彼の弟を捕へて殺しその首を槍 再去年盟誓時。 この こ」に兵を率るて出 及厄魯特之向與喀爾 一處遊牧。 これ 使の苦言が略 につど 視其情 然しさ 一謝圖汗 餘俱 いて ワー 土

薩克圖 ことではない。その軍中には又西喀爾喀の長が参加してゐた云々(第八章上謝圖汗の部) 構兵するに至つた次第を明らかにし、その是非直曲を定めたが、 つたとみるのが至當のやうである。 丹巴胡土克圖削去名號。 爾 よつて土謝圖汗奏中の往復文書の內容が明白になるし、 依附噶再丹博碩克圖。因用兵擊殺之。巧辭掩飾殊屬不合。 8 に關係のあつたことが首肯出來るこおもふ。 クの長であり札薩克圖汗の 3 尊丹巴胡土克圖等。 て我が弟多爾濟札トを殺したここをあげて戰の責任は喀爾喀にあると主張してゐる。 々といつて噶爾丹をその庇護者としてゐるが、 0 0 0 かと思は は 地に會盟せしめて、 であ どうか。 汗が鳴爾丹に投じたさいふのは事實にあ b れる。 兩者伯仲の勢力の間にいる~~のデマが飛び、 札薩克圖汗が噶爾丹と好を結びしことは、 方噶爾丹は又その出兵の理由として、常に罪なくして札薩克圖汗を殺し、更に侵入し 盡壞喀爾喀生計致起兵端。其引罪之奏妄稱札薩克圖汗得克得黑墨爾根阿海背喀爾喀。 爲小喇嘛。 正式に清朝に服屬の禮をさらせたが、 Patron である噶爾丹の代表者も其處にゐたさいひ、又噶爾丹の Protége 沙喇 仍令土謝圖汗管轄(東華錄康熙冊) このべてゐる。 鳥闌布通の大勝後、 事實この問題によつて土謝圖汗と噶爾丹の間に隙を生じた は 83 先の上謝圖汗澤卜尊丹巴の兩奏をみて考へても兩者間 それを口實として上謝圖汗等兵端を起し云 又これ等によつて先攻に出たの 康熙帝は內蒙古に亡命中の喀爾喀蒙古を多倫諾 應將土謝圖汗削去汗號。 同じくホワースに庫輪伯勒齊の會盟にカル 遂に王謝圖汗の方から出兵したも その會盟に於いて先づ喀爾喀が噶爾 この時馬齊等が奏して、 この馬齊等の 爲間散台吉。 康熙帝も亦公然こ とある。 は 土謝圖汗澤上 土謝圖汗であ のではな 澤卜尊 奏に札 なこあ

時の 一章))ことがわかる。吾々はこの自負心をもつて土謝圖汗は噶爾丹に對抗したことを知ると同時に、當史第十)ことがわかる。吾々はこの自負心をもつて土謝圖汗は噶爾丹に對抗したことを知ると同時に、當 直裔として、又その發祥の地に住む者として、大きな自負心をもつて全蒙古民族に臨んでゐた(デールジ を擁してゐたことを考へねばならぬ。 れを認めてゐたやうである(常味見ゆー)。 0 は 土謝圖汗はもはや喀爾喀左翼の土謝圖汗ではなくて、 土謝圖汗と哲ト尊丹巴の兄弟であつた。 西域に勃興した噶爾丹に對抗して隱然たる勢力を備へてゐた ブールジャーによると、 全略爾略の長として重きをなし、 この時代の喀爾喀 は成吉斯汗の その實勢力

遂爲厄魯持覬齯(蒙古記二) と述べてゐる。 噶爾丹領勁騎三萬。 年の平和を滿喫した魏源時代の蒙古をとほしてみた蒙古観ではないか。 の喀爾喀蒙古に就いて、 而噶爾丹言之不已。 以激其怒。 內開。 魏源の聖 西北一帶を攻略席捲し先には西方回教國にまで大遠征してゐる噶爾丹の軍に紛碎されたからとて、 の喀爾喀を直ちにかくの如く墮落せる蒙古で觀るのはあたらない。 我朝遣使偕西藏達賴之使。和解三部。 土謝圖汗果執殺之。裝爾丹遂藉詞報復。揚言借俄羅斯兵且至。喀爾喀探之。無其事守備僻。 武記は噶爾丹の喀爾喀侵入について、 逾杭愛山突襲其帳。 喀爾喀盆不信。噶爾丹潜遣剌麻千人。游牧其地。 初喀爾喀世雄漠北。 游牧剌麻從中應之。 蒙古民族の衰徴はこれは被ふべからざる歴史上の事實である 及中葉專侫剌麻。 噶爾丹使共族人多爾濟札布隨而覘之。故使娛罵土謝圖汗。 會喀爾喀土謝圖汗。 土謝圖汗倉卒潰遁(準噶爾記) ご記し、 習梵唄。 喀爾喀亦不以爲意也。二十七年夏 執殺札薩克圖汗。 この時代に既に全く遊惰となり これは清朝治下に入つて百數十 懈武事。 又部族嗜酒。 而奪其妾。三部 自相陵蔑 又當時

制覇の爭であつた。蒙古近世史上に於ける大きな政治上の爭こして考察せねばならないとおもふ。 噶爾丹侵入の因となつた喀爾喀の內寇はもつと大きな歷史的觀點からみるべき 左右兩翼の勢力争であつ 噶爾丹の警に備へず、 つまらぬ口實を噶爾丹に與へてその侵略蹂躙にまかせた如く記した聖武記の記事 二汗有り左翼は土謝圖汗と號し、 なつてゐるのではないか。 は少くとも安當ではない。然しながらかくの如き噶爾丹觀喀爾喀觀は魏源のみならず、 ぬものである。 換言すれば下り阪にあつた蒙古民族の絕えざる內紛狀態の中から擡頭した上謝圖汗部による全蒙古 魏源の如きもその認識の不足は、 清朝史家の西北問題に對する淺見誤謬は、 右翼は車臣汗を稱す(漢述略)をある、 喀爾喀の争を單なる私闘の如くみてゐるやうであるが 趙翼の皇朝武功紀盛に、 一記述をみても 到底讀むに耐 般的な通念に 喀爾喀に

琿台吉の子孫であり、 は出てゐないさうである) 属した(第八章第一節) と述べてゐる。 て、 め 一人故土に留つて部する所を喀爾喀といひ、又その衆萬餘を分つて七旗となし、 蒙古遊牧記によれば、 西翼には第一第二第四第七の子、 左右兩翼に分つたどある。ホワースにはその子七人の名が見えてゐるし、 上謝圖汗はその第三子諸諸和から出で、車臣汗は第五子阿敏都喇勒、 喀爾略は達延汗の末子格埒森札札賽爾琿台吉が、 その兄達の内蒙に移住せる際 東翼には第三第五の子が(その第六子は子孫がなくシ 札薩克圖汗はその第一子阿什海達爾漢 更にシュ 子七人に授けて領せし ミット 賽音諾彥部 ミットに を引用し

噶爾丹侵入當時の外蒙喀爾喀

をどつたのは略同時代であつたやうである。 時代に至つて、 長 は土謝圖汗と同じく諾々和から出てゐる。 それ 〈 札薩克圖汗土謝圖汗車臣汗の汗號をこなへた。 喀爾喀には元來汗號はなかつたが、 遊牧記によればその三汗の汗號 素巴第、 衰布、 碩壘の

この の地 所請。 ことを請ふた奏言が載つて居る。これに對して康熙帝は議政王大臣等に議せしめた結果、今年略爾略が 汗の統擬するものであることを清朝にみとめさせるに成功したものと思はれる。 か。 土謝圖汗に代つて之れ等の罪を解くやう清朝に交渉したものであらう。 その後又左翼の四族は札薩克圖 克圖部人額爾德尼諾木齊を諭されて、爾奏言。 旗を飜した。 藩部要略をみると、 子孫である。 以上によつてみれば右翼札薩克圖汗は喀爾喀の祖格埒森札札賽爾琿台吉の長子阿什海達爾漢琿台吉の 時清朝に來降して、 車華錄康熙二十九年五月甲午の條に、 厄魯特に投じて阿爾泰山南にゐたといふ額爾克阿海巴郎が、 位が、 可速飭爾部長遣子來朝云々とある。これらをみると札薩克圖汗は自ら喀爾喀の長として、車臣汗 順治帝はこれに對してその辭は悖慢であるといつて拮責されてゐる。 その後長い間の内紛によつてその勢力を失墜するこ共に 忘れられた狀態にあつたのではない その後で札薩克岡汗素巴第は代つて罪を解かんこ同族俄木布額爾德尼と 上書して好を乞ふ その為 順治三年車臣汗碩壘は蘇尼特部長等を誘ひ、 全喀爾喀から尊敬をうけ、 札薩克圖汗は喀爾喀七族の長なることを述べて、 喀爾喀左翼四旗。 元來七旗の長たる地位を占めてゐたやうである。 皆爾統攝。 土謝圖汗等もこれに關係して清朝に叛 札薩克圖汗の後繼者を立つる 凡有敕諭罔弗遵行。 叉同十一年に順治帝は札薩 かくの如 き札薩克圖汗 今即

札薩 仍令承襲と、 丙戊の條に、 來降して會閱があるから、 喇嘛に土謝圖汗が逃亡者を歸還せしめないここを訴へた時、 清朝のものもこれを認めてゐたことがわかる。 克圖汗を尊ばねばならぬことを説いてゐる。 やはり札薩克圖汗が喀爾喀七族の長なることをのべてゐる。 馬齊等が又奏して、 その時に決定することになつた。 札薩克圖汗乃喀爾喀七旗之長。累世抒誠進貢。 先に引用せる康熙廿三年二月庚子の條にも、成褒が達頼 達賴喇嘛もこれを承認してゐるやうである。 達頼喇嘛が七旗を諭して、 愈々大會盟となつた東華錄康熙三十年五 喀爾喀右翼のもの」みならず 札薩克圖汗名號 汝等七旗は共に 似應

車臣 せる喀 在の子は幼稚なる爲、 如何なる政策をとつたか。こゝに特に注意すべきはこの點である。この會盟に際し、 あつた。 n 古王族の封爵は全て康熙卅年以後になつてゐる。 清朝に服屬の禮をとらせたことであつた。 王に封じてゐる。 たの 康 汗の順序であり。 熙帝は失張りこの點に考慮をはらひ、 は大會盟以後とみるべきであらう。 爾喀王族 噶爾丹ミ對陣中の内蒙古に於けるこの大會盟に康熙帝は紛爭絕えなかつた 外蒙喀爾喀に對して の席次がある。これをみると土謝圖汗、 この康熙卅年多倫諸爾大會盟の意義は誠に大きい。第一には外蒙略爾略をして正 皆から賢を以て稱せられてゐた汗の親弟策妄札トを立て、 これを第一 行さして餘を七行に分ち、 第二には長年にわたつた喀爾喀の内紛問題を解決したことで 光緒大清會典事例卷九百六十九封爵外札薩克をみると、 多倫諾爾の會盟に於いて札薩克圖汗の後繼者をたてる時、 これをみてもその間に服屬關係を生じ、 澤卜尊丹巴胡土克國、 次序を以て席につかせてゐる。 札薩克圖汗の弟策妄札ト、 彼を最高の爵位和 理藩院が遵旨酌定 正式に封倒さ 又康熙帝の 外蒙 碩親 現

與へてその部衆を領せしめ、 時札薩克圖汗の現存せる子はまだ幼く、策妄札トに親王を與へたのであるが、この策妄札トもまだ若く あり、 旗を一視同仁にみられることになつた。外蒙についてはこの席次をみればわかるやうに、土謝圖汗が第 等の官書には何れも四十二年になつてゐる。皇朝藩部要略も亦四十年だが、その藩部世系表をみると、 はないかど思はれる。 この時皇帝は皇子の衣冠を賜つたミいふ弱齡であつたのミ、當時右翼略爾喀は殆んど散亡してゐた爲で 尊丹巴の次に席したのは親王策妄札トであつて、 碩親王を與へたのである。然しこの時策妄札トは汗號を襲いでゐない。 つた札薩薩克圖汗に對しては、公平を標榜した清朝さして、その後繼者策妄札トに唯一人最高爵位の和 翼略爾喀を主體としたものゝやうであるから、これは當然なことゝ思はれる。 然し從來喀爾喀の長であ 狀保持を主眼とした清朝の政策であることはいふまでもない。 叉内蒙四十九族に實施されてゐた族制に編成されてその官爵が採用され、早くから服屬せる內蒙四十九 命によつて同じく會盟に臨んだ内蒙四十九旗と外蒙喀爾喀は同列におかれてゐる。こゝに於いて外蒙も 位を占めてゐるのをみると、土謝圖汗を喀爾喀に於ける長たる地位に据えたものであるが、 札布和碩親王。 特に札薩克圖汗部の右翼蒙古が散亡してゐた當時にあつて清朝治下に投降した略爾喀蒙古は、 代領部衆。始稱札薩克圖汗部。 札薩克圖汗が汗號を襲いだのは康熈四十二年である。蒙古遊牧記に、三十年特封 四十年にはじめて汗號を襲いだやうになつてゐるが、 土謝圖汗策妄札トではなかつたやうである。 四十年命仍襲號とあつて、 實際略爾略に於ける實權者は土謝圖汗で 大清實錄をみても土謝圖 三十年には親王の爵位を 大清會典大清一統志 これは當 これは現 左

をく。 錯雜を來したのではないか
を思はれる。 矢張り四十二年とある。本文の方は四十一年四十二年の記事なく四十年から四十三年にとんでゐる爲、 大清 土謝圖 右翼は僅かに九札薩克である。 七札薩克爲後路。車臣汗之十二札薩克爲東路。札薩(克)圖之九札薩克爲西路。 るまいか。 爾喀總叙をみると、康熈卅五年朔漠平定して喀爾喀諸部が再び舊牧に還つた時は、三部を編して五 B 土謝圖汗。喀爾喀有四部。 たことは、 に至る間に圖什業圖汗車臣汗の二部落にて十四族の増加をしてゐるのに對して、 内云々とある。これによつて計算すると札薩克圖汗部はこの時十二旗になつてゐる。 旗となしてゐる。 かる。土謝圖汗車臣汗の合計二十九札薩克が左翼であつたわけであり、 たのみである。 一統志略爾喀文中の註に引用せる、會典三十一年。編喀爾喀旗分左領。 分爲三路。將土謝圖 噶爾丹の死後、喀爾喀蒙古は故土に歸つたが、 汗の勢力下にあつた左翼より車臣汗部を獨立させることになつたものと思はれる。 當時右翼の部衆散亡してその多くは左翼に集り、 皇朝藩部要略に……凡十九札薩克。別爲一部。以其賽音諾顏號冠之。 その五十五旗の下にある註に、理藩院則例。圖什業圖汗。 かくて雍正三年になつて更に土謝圖汗部より賽音諾顏部十九旗を分離して 一部 こなし 自此始とあるによつて窺ひ知られる。 遊牧記略爾喀總叙によると雍正三年に かくてこの卅一年に喀爾喀が從來左右翼に分れてゐたのを三路となし、 これ等の記事によつて汗號を襲いだのは矢張り四十二年として 其處に歸つて部衆も集り汗號を襲いだものではあ 左翼の部衆過多になつてゐたことは、 それに對して札薩克圖汗部 車臣汗二部落四十三旗台吉 各接旗分給印によつて 稱喀爾喀中路。 札薩圖汗部は三旗を増 升 一年より卅 蒙古遊牧記略 不復隷 汗之十 五年

政策として生れ は とになつたので 四部 七十四族になつてゐる。 出たものであ ib b かうして喀爾喀の四大部が成立したが、 喀爾喀の平和はこれ以後、 四大部の勢力均衝狀態によつて保 それ は土謝圖 汗部 0 勢力削減 たれるこ

英雄 の間 ので 藏と清朝の主唱下に會盟を餘儀なくされた結果、 圖 月丙戌の條)卅年の大會盟に於いてはじめて自己の非を認め謝罪して汗號を許された、熙十八年正)卅年の大會盟に於いてはじめて自己の非を認め謝罪して汗號を許された。 であ かるので 席せず、 を忘 言によつたやうにのべてゐるが、 噶 はな 噶爾丹の侵入した喀爾喀には又この偉大なる活佛がゐた。 に残つてゐる。 0 翻 n たことが首肯出來る。 丹の指 ては 清朝治下に入つてからも尚ほ清朝が襲爾丹との間に媾和せしめんとした會盟を拒 あ かつたか。 る。 摘 ならな 然し吾々は噶爾丹と拮抗した土謝圖汗をおもふとき、 した土謝圖 この第 哲ト尊丹巴胡土克圖所謂蒙古第一代活佛の偉大に就いてはいろ~の 60 ホ ワ 汗の傲慢横暴は、 一代活佛こそ土謝圖汗部の實權者であり、 1 土謝圖汗自身その行為の不正なるをみとめてゐたことは、 スにも土謝圖汗が扎薩克圖汗の逃亡者を與 かの庫輪伯勒齊の會盟に哲ト尊丹巴が使者として臨席 當時喀爾喀に占めたその勢力を併せ考ふる時、 遂に哲ト尊丹巴自身がやむなく出馬することになつた この 點に特に注意した 全喀爾喀を率るてゐたので その影にあつた哲ト尊丹巴胡 へなかつたのは、 これ等をみても 3 二回 おも 説話が蒙古人 L んで居り たの 哲卜尊 0 それ 會 は事實 盟に出 西

圖 の地位は、 清朝治下に入つた土謝圖汗の勢力は漸次削減されたのであるが、 庫熙帝の保護下に益々その地歩を固めた。 然しこれは從來占めた胡土克圖の地位を康熙帝 全略爾略に於ける哲ト尊 丹巴 胡

に蒙古諸王を紹介したのは彼であり、一々その人物評を下して謁見せしめた (同書第) こいふ。これより が利用したものに外ならない。喀爾喀に於いてそれまで占めた哲ト尊丹巴胡土克圖の地位は、 處ではない。どうしても全部支那に投じて萬年の福を得るに如かずといつて、 ふたっ 先き喀爾喀が清朝に來降したのも一に彼の言によつて決したこいはれてゐる。 3 大會盟に於いて土謝圖汗につぐ席次にあるのをみれば略わかる。 最初から清朝に降る意圖があつたかどうかは甚だ疑はしい。 かうした事情は又その以後康熙帝を活佛を兄弟もただならぬ關係に置いたものであるが、 用された註文附記をみてもわかるやうに、 とになつたといふ。これはかの松筠が綏服紀略に於いて述べてゐる處であり、 爾喀蒙古は露西亞に降るべきか、 哲ト尊丹巴胡土克圖は又この大會盟に於いて始めて康熙帝に謁見したのであるが、 その時胡土克圖は、 俄國はもご佛を奉ぜず、 乃至は支那に附くべきであるかに迷つて決を哲ト尊丹巴胡土克圖に請 當時から蒙古人間に傳へられた餘りにも有名な史話である。 習俗は我等と異り異言異服であり、 ボズドニエフの蒙古及び蒙古人による 噶爾丹の侵略に遭つて喀 それが又蒙古遊牧記に引 遂に康熙帝に投降するこ 久しく安住する その席上康熙帝 當時の活佛が 多倫諾爾

直ちにトランスバ まつた後であつた(二章第) といふ。康熙廿七年七月哲卜尊丹巴胡土克圖は清朝へ鳴爾丹の侵入を報じて もらふことをたのませた。然し使者がゴロウインの下に現れたのは、 コ ス 1 ヴィッツの成吉斯汗よりソヴィ イカルにゐた俄羅斯の使節ゴロウインに使者をたて」、 工 ート 共和國までによると、 既に喀爾喀が満洲人に降服してし 彼は噶爾丹の侵略をうけるや、 俄羅斯の國民として編入して

噶爾丹侵入當時の外蒙喀爾喀

獨立 がわ 物を送つてゐる(同書第二章ゴロ)のをみると哲卜尊丹巴とゴロウインの關係も又以前から生じてゐたこと 派遣されたゴロウインは先づ露支關係緊迫の際とて、 六八九年六月まで、 阿喇尼等と遇つてゐる。 決したものといはねばならぬ。 ゐるが、その九月には土謝岡汗と共に清朝に來攻してゐる。その途上對露交渉に派遣され 0 あ を求めた結果であつた(豪古及蒙古)といふ。 うに決定したのは、 には態度決せず俄羅斯にも使を遣つたのであつた。 と會議する筈になつてゐたセレ やうに思はれる。 つたやうである。 よつて清朝服属となつたが、それはやむを得ない をは かる。之等からみてこの 出發以來二ケ年間草道をくつてをり、 からんとしたものではなかつたか。 ウデインスク、セ **噶爾丹に追はれて境外に出て内蒙の阿魯額埒蘇圖に會盟を行つて、** 當時外蒙に對する俄羅斯と清朝の勢力關係をみる時、 この蒙古第一代活佛哲ト尊丹巴胡土克圖こそ、 これ H はカーヘン著早期の露支關係によると、ゴロウインは一六八七年十月から シャ遺使は決して突飛な事件ではなかつたのである。喀爾略が活佛の一言 それはこの裁決の一言を與へたさいふのみではなく、 2 ギンスクに往く支那側使節であつた。 V ンギンスクの地 既に清朝勢力下の内蒙に入つて、 ウルガ即ち庫倫の胡土胡圖の下に遣使して好意ある手紙と贈 喀爾略に雄視せんとした活佛の考としては、 事情の ボズドニエフによると、 蒙古と關係を結ばんとし、その爲一六八六年モ 方に殆んど二ケ年間滯在してゐる。 もとに行はれたとみるべ その後に於ける外蒙略爾略 寧ろ俄羅斯に投じて喀爾喀 12 喀爾喀が清朝に投降するや 大勢既に定つた後 シャ使節としてこの地 き點があ もつと遠く深い原 哲ト尊丹巴の決 た支那側の使節 その その 5 その の決意で 0 方が自然 運命 12 方に ウィ 最 初

尊丹巴胡土克圖は今日から省られねばならぬき考へるのである。 因 即ち當時土謝圖汗部の勢力を背景として全略爾略をかくの如き狀態に導いた責任者として當然哲ト

Ξ

實に政教兩方面にわたつて西藏新疆蒙古の西方諸國を壓してゐた。 し得ないものが甚だ多いのであるが、 西北地方一帶に沙り、 その死は擾亂の虞があるとて公表されず、 つた。この怪僧の時代に噶爾丹の喀爾喀侵入が行はれてゐる爲、 の地位にあつて實權を握つてゐたのは、 を西蔵に招き、 れたものであつた。 めてをり、 噶爾丹の喀爾喀侵入についてはどうしても彼と喇嘛教の關係を明白にせねばならね。 厄魯持の博克碩汗噶爾丹と喀爾喀の哲ト尊丹巴胡土克圖溫都爾格根は、 第五代達賴喇嘛納旺羅ト藏札ト素の弟子であつて、 その兵力によつて喇嘛教の諸派を抑へて黄教喇嘛を流布せしめたが、 第五代達賴喇嘛は歴代達賴喇嘛中の傑物であつて、 喇嘛教にも闘すること」て史料に乏しく、 自分はこゝに於いても又その初期の問題について一、二考察して 達賴喇嘛の第巴(康熙帝の勅諭中に理事の人とあり)桑結であ 十六年間の長年月その死が秘せられてゐた。 その汗號名號は何れも達賴喇嘛から贈ら 事件が非常に複雑となり、 その眞相は明瞭を缺き直ちに斷定を下 その爲第五代達賴喇嘛 その初め青海和碩圖部の碩實汗 共に西藏に入つて喇嘛教を修 その後彼の勢力は その間達賴喇嘛 の死するや、 且つ西蔵

みたい。

ح うに思はれる。 圖汗哲ト尊丹巴は達頼喇嘛の教に違ひ云々が出兵の理由になつてをり、 30 又海三代に嘱して轉奏して澤卜尊丹巴は天朝に來り投ずれば拒絕するか、 30 以てしたが聴かず、 澤卜尊丹巴胡圖克圖 約定の日も近づいたから阿喇尼等を前往せしめ、叉喀爾喀各地に使を遣り會盟の開催を報ぜしめてゐる。 0 同赴盟所。 旗不睦。 尊丹巴の抗禮は何れの書にも說く所であるが、哲卜尊丹巴としては、又それには一つの理 哲卜尊丹巴の不遜が直接問題になつてゐることがわかる。 |出席は會盟が近づいて突差に決定したことが明瞭である。これは同上廿五年乙酉の條に、 がわかる。 東華錄廿六年七月甲戌の條に侍讀海三代は當時對露談判使節として その途上にあつた阿 彼兩人は衆の許す所ではなく殆んで往く所がない、たとひ往くとも亦納れられないのである云 澤卜尊丹巴の處に行きその途上厄魯特軍に遇ひ、 これが鳴爾丹の喀爾喀侵入にあたつて清朝に 遣使於達賴喇嘛。 竭誠公議。 然し又その終に上命移文尚書阿喇尼。 大清實錄廿五年六月乙卯の澤卜尊丹巴の遵論覆奏をみると、 竟に兵を興して襲來した。 土謝圖汗は達頼喇嘛の教に違ひ、 以仰副聖懐とあつて、 而達賴喇嘛亦造與爾夏西勒圖爲使赴盟。 胡上克圖の會盟に臨んだのは清朝の命によつて出席したこ 我は達賴喇嘛の靈に仗つて來つてその居を毀したのであ おくつた最初の奏疏のやうである。 噶爾亶西勒圖等知之とあるのをみると、 噶爾丹西勒圖を尊び禮せず、 噶爾丹の奏疏を携 この會盟に於ける學爾丹西勒圖 諭臣亦至盟壇。 それには廿五年の會盟に於ける へて歸つてゐる。 之を擒へて與へよこのべてゐ …… 今蒙聖慈。 之に告ぐるに禮 共議共事。 これ 喇 2 由があ 1= をみ 尼の 念喀 達頼喇嘛と 哲卜尊丹巴 對する哲ト 0 n 臣當遵旨 疏 ば に 使さし 爾喀七 つたや 上謝 な。

である。 だからと云つて直ちに達賴喇嘛の使者と同等の席につく理由にはならないが、それを要求した が、こにかく彼は土謝圖汗の代理としてドなく、全喀爾喀問題を解決する胡土克圖として臨席したもの 果して土謝圖汗自身が出馬したのである か、二十五年四月、 翼互相侵占之台吉人民。令各歸本主。一切應結事件。倶審定完結とある。こゝに兩汗とあるのを見ると 月二十三日檢選所屬才能案桑六十餘人。俱至喀爾喀噶爾亶西勒圖澤卜尊丹巴胡土克圖前。 年十月戊午の條に、理藩院尚書阿喇尼が會盟の次第結果を報告して、 たのではない した形式にて出席することになつたのか。 人に加へたのか。乃至はこの報に接して土謝圖汗部はうろたへ胡土胡圖の方から清朝に交渉して、かう この報をもたらした處土謝圖汗部の態度により會盟困難とみたから、急に哲ト尊丹巴をその主催者の一 土謝圖汗の長子噶爾旦多爾濟か、弟の西第什里の何れか汗を代表したのか、これ等の點は明瞭ではない その出席が考へられ、 かと考へられる。 これは札薩克圖汗と車臣汗を意味するのか、 何れにしても彼は土謝圖汗の代理として出席したのではない。 閏四月の會盟が十月まで延びてゐるのはかうした原因によつ 車臣汗の處にも遺使されてゐるのを見る 臣等遂令兩汗及濟農台吉等。 乃至はこの會盟に臨席してゐる 設立重誓。兩 同 上廿五 於本

口 はなか にしたのをみると、 噶爾丹は然し土謝圖汗哲ト尊丹巴胡土克圖を攻撃したのは、 った。 彼が土謝圖汗兄弟を達頼喇嘛の教に違ひ、 もつと深い理由がなければならない。 達賴喇嘛の敵であると、 これがたこひその侵略行爲を糊塗する口實 單に廿五年會盟の席に於ける無禮 これを最後の のみで 根據も亦考へられるわけである。

嘛と元來仇敵關係であつた宗派に屬してゐることである。 の奥義を授けられた弟子ではあるが、 位も又達賴喇嘛によつて認定されたものであるといつても、 最初に侵入した厄魯德尼招の寺院は達賴喇嘛派に對立した釋迦派の建てたものであつたこと、 こゝに紙面の都合上一々引用は出來ない。このボズドニエフの記述によつて知られるのは、 集せる資料傳說の研究が載つてゐる。これが哲卜尊丹巴に關する最もまさまつた研究のやうに思ふが、 古及び蒙古人(東頭同文會)には、特に哲布尊丹巴胡土克圖の呼弼爾罕に闘する一章があつで、 したもので、地位そのものは達頼喇嘛の宗派に属するものではなかつた。 そのものを觀察して考へてみねばならない。 過ぎなかつたにしても、 西藏と喀爾喀の關係が疎遠となるに至つて、 口實となり得る根據があつたことをおもふ。こゝに於いて哲卜尊丹巴の その哲ト尊丹巴は釋迦派のグラナタの呼弼爾汗であつて、 蒙古研究特に喇嘛教研究の第一人者ボズドニエフの 自然西藏に依存しなくなつたことが考へられ これ等の點からその後噶爾丹が西方に割據し 彼がその勢力を外蒙に張る一手段として推 即ち彼は達賴喇嘛から黄教派 現地にて採 噶爾丹軍 活佛 達賴 地位 の地

嘛輩(六百人といふ)は喀爾略に教義の發達したる程度の微々たるをみて、 n 者となつたから、 るが、全くこれに闘する證差のないのは怪しむべきである。 同書同章には又、 人民が知らず識らずの間に之を自派に化することが出來ると看破したものらしい。 從來喀爾喀に行はれた釋迦派流の儀式宗規等を根絕するに力を 盡したであらうと思 一六五一年活佛が喀爾喀に歸ると、 達賴喇嘛の崇拜者となり、 想ふに活佛と同行したゲルーグバ派の喇 喀爾略人とは毫も争ふこと ゲルーグバ派の尊信 是を以て西藏

T のは、 丹が哲ト尊丹巴は達賴喇嘛の敵なりを稱して喀爾喀に侵入し、 ゐなかつた爲、これらの敎派は史上に殘るやうな大問題を惹起するに至らなかつたものであらう。 力したといつても、尙ほ依然として黃敎以外の宗派の勢力が支配したことは同書に 又かの釋迦派のグラ 巴岱汗の持ち歸つた喇嘛教は釋迦派に屬したものであることがわかるし、 立に着手したが、その一つが今日の庫倫であつたことが述べられてゐる。 0 寺院であるから、活佛自身の宗派も矢張りそれに近いものではなかつたか。 その教義もどこまで、黄教派を選奉したか疑はしい。 厄魯德尼招の寺院は元來釋迦派に屬し、歴史ある 爾丹の喀爾喀侵入以前哲ト尊丹巴は、 ける最大の寺院を燒き拂ひ、更にホワースによゆと哲卜尊丹巴の建立に かくる二寺院を破壞したとある ナタが西藏から迎へられて最後に蒙古で死んでゐる點等から考へられる。 たゞ蒙古人の教義が發達して ある。 喇嘛達が苦心したのは、唯活佛をして釋迦派の古寺に住まはせないことであつた。かくて新寺院の建 達賴喇嘛の教敵たる釋迦派の寺院としてかくの如き亂暴な破壞を敢てしたのではなからうか。 喀爾略に歸つた當座は新寺院にゐたにしても、その後又こへにも住つたことが知られる。 ホワースの前掲書皇朝藩部要略等によれば厄魯德尼招にゐたやう 先づ厄魯徳尼招を襲ひて當時喀爾喀に於 その後圖蒙官等黄教流布に盡 これ等の記事に依つて先に阿 噶

7-0 その態度は自然不遜となり、 厄鲁特蒙古と喀爾喀蒙古は政治上から對立し、 それは完全に教義上から對立したものでは勿論ないにしても、 ひいては達頼喇嘛の言を奉ぜず、 哲ト尊丹巴は喀爾喀蒙古に一大勢力を布くに及んで、 遂に達賴喇嘛の代表者と席を争ふに至つ そうした活佛の態度に對して厄魯特

の政教兩方面に占めた地位を勢力を考慮に入れなければ、 丹自身第巴の言に左右されたやうに觀てゐるが、これには又その一面に於いて當時哲卜尊丹巴胡土克圖 これは達賴喇嘛の言を弄した第巴の策謀であり、 爾丹に投じた如き、 交渉中に噶爾丹を逃亡せしめた如き、又屢々清朝から噶爾丹に使はされた伊拉克三胡上克團が、 は噶爾丹の爲に誦經し、且つその戰日を擇び、噶爾丹の敗れるに及んでは叉講和を以て詞ごなし、その 蒙古は殊更教義宗派の點から問題となし、 かと考へる。達頼喇嘛の噶爾丹に使はした濟隆胡土克圖が全く噶爾丹の影武者となり、 その他大小喇嘛の噶爾丹に心を寄せ、 西北地方一帯にわたる喇嘛の心をこらへたものではなかつた その指令によるとも考へられる。 到底理解し得ぬことではないかと思ふ。 これに投じた例は枚擧に遑がないの 康熙帝の如き、 鳥闌布通の役に である。 遂に噶 噶爾